

研究課題 (テーマ)		術後の状態変化を想定したシミュレーション教育の学修効果と実態に関する横断的調査研究		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部 看護学科	講師	寺内 英真	
分担者	看護学部 看護学科	教授	栞子 嘉美	
		助教	竹口 将志	
		准教授	城戸口 親史	
		准教授	河相てる美	
研究結果の概要				
<p>【背景・目的】</p> <p>近年、患者の権利擁護・配慮の観点から看護学生が臨地実習で実践技術や臨床判断力を学ぶことが難しくなっている。また、看護系学士課程コアコンピテンシー（平成30年6月）で「根拠に基づいた看護」や「急激な健康破綻のアセスメント」など、看護基礎教育で求められる能力が提示されており、これら状況からシミュレータを使用した状況設定演習による教育の必要性が高まっている。令和3年度より本講座で実施しているシミュレータを用いた『術後の状態変化を想定したシミュレーション教育』の学修効果と実態について、令和4年度の実施状況との比較から明らかにすることを目的に本研究を実施した。</p> <p>【研究方法】</p> <p>成人看護学演習Ⅰで実施した『術後の状態変化を想定したシミュレーション教育』での観察、看護援助について、チェックシートに基づき自己評価した記録からデータ収集を行った。さらに、観察と看護援助の実施率について、令和3年度と令和4年度の結果を比較し、それぞれの特徴と傾向について検討した。</p> <p>【結果】</p> <p>術後の状態変化場面として「術後疼痛」と「術後無気肺」を設定し、それぞれの観察・看護援助の実施状況について調査した。結果、両場面、両年度で実施率の高い項目は、『バイタルサインの観察』であった。一方、『顔色などの観察』『心電図の確認』での実施率低かった。令和3年度の特徴としては基本的な観察項目の実施率が高く、全身観察を行う傾向がみられた。令和4年度の特徴としては、アセスメントやSBARでの報告の項目の実施率が高く、情報の分析・統合に強みがある傾向がみられた。各年度での学生の特徴や傾向があるが、どちらの年度の学生も必要な観察項目は最低限挙げることができているという結果となった。しかし、顔色や心電図など状態変化と関連した観察項目に視点を広げていくことが苦手であることが明らかとなった。</p>				
今後の展開				
<p>学生の実施状況や記録の記述内容から、学生の苦手とする点に関する示唆が得られている。これら内容について補助・強化できるよう教材の開発と評価、演習課題の見直しにつなげていきたいと考える。今後は、横断的調査から縦断的調査が行えるよう準備し、継続的な学生の学修状況の評価とよりリアリティのある学修につなげていきたいと考える。なお、本研究成果については、学会発表および論文投稿を予定している。</p>				